

## 南房総市に残る発射台跡



桜花の発射台の跡の上に立つ愛沢さん(左)と佐久間さん。細長いコンクリートは約100㌢にわたる=南房総市下滝田

りする様式だった。終戦までに約750機が生産され、多くの若い命が散った。それでも、軍は「肉弾」の効率化を図った。45(昭和20)年、米軍の本土上陸が現実味を帯びてくると、軍は“最後の切り札”作戦の準備を急いだ。「新型桜花」の開発。飛行機を使わず地上から発射できるよう、改良を目指したのだ。

「陸上発射式なら、沿岸部に停泊した米軍艦を直接攻撃できる。効率が良いと考えたのだろう」。市の歴史などを研究するNPO法人「安房文化遺産フォーラム」の愛沢伸雄代表(63)

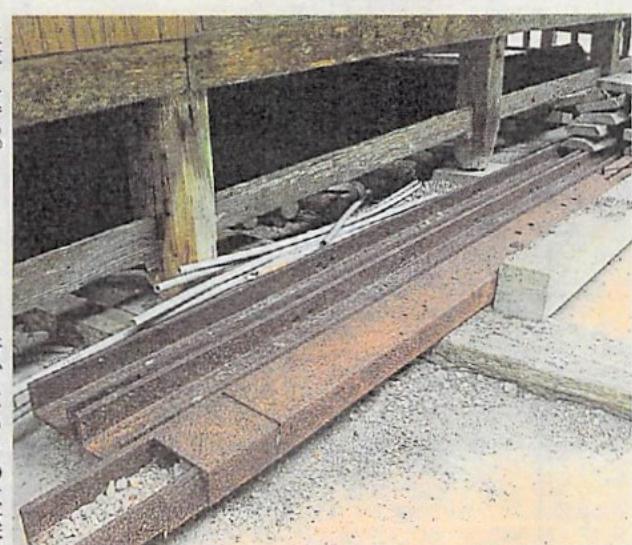
と振り返る。まつた」(愛沢さん)。だが、新型「桜花45乙型」の機体は試作段階のままで終戦を迎える。

作戦は市民をも巻き込んでいた。同年春、軍は三芳村(現在の下滝田地区)に新型桜花の発射基地建設を決定。米軍の上陸が予想された館山湾から近いことなどが理由だった。突貫工事に駆り出されたのは、10代の少年兵ら。

工事は終戦当日まで続いた。朝鮮人労働者の姿も多く見られた。佐久間さんは、「崩落で亡くなった人もいる。辛くて怖い思い出の場所で、今も近寄りたくない」と語り、「若い命を使い捨てる。辛くて怖い思い出の場所で、今も近寄りたくない」と語る。愛沢さんは、「この穏やかな街で、何が行われようとしていたのか。二度と戦争を起こさぬよう、後を生きる者がしつかりと語り継いでいかない」と

## 新型桜花の出撃準備

と振り返る。



寺の境内に放置されている鉄骨。発射台のレールに使用される予定だった=南房総市下滝田の「知恩院」

## 戦火の記憶

ちば戦後70年 遺構は語る

(中)

のどかな田園風景が広がる南房総市下滝田地区の山中。野菜や果物が植えられた畑の中を、100㍍にわたり古びたコンクリートが

横切っている。

70年前、本土決戦の秘密兵器として海軍が開発を進めていた日本初の特攻ロケット「桜花」の発射台跡。

終戦を迎え、この場所から桜花が出撃することはなかつたが、唯一残った無機質なコンクリートだけが、その恐ろしい計画の存在を静かに伝えている。

桜花が初めて開発されたのは、1944(昭和19)年。当時の初期型は、飛行機の下につり下げて敵艦近くまで移動した後に切り離し、搭乗員もろとも体當た

は、世界でも類を見ない最

新鋭の設備だった。「火薬

ロケット噴射などを使用

し、わずか8秒で離陸でき

る世界トップクラスの技

術。この国はそれだけの能

力を、人間爆弾に使ってし

はそう指摘する。

新型桜花の開発には最先端の技術がつぎ込まれた。

中でも、桜花を離陸させる

ための射出機「カタパルト」

## 基地建設で少年兵ら犠牲